武江年表　三

内閣文庫
和書 類
三二七五九 號
八 冊
一四一 函
五 架

210
閲

内閣文庫		
番號	和	32759
冊數	8 (	3)
函號	141	86

共八

国立公文書館
National Archives of Japan

武江年表巻之三

延宝元年 癸丑 九月廿一日改元

牛嶋弘福寺草創 開山鉄牛禅師なり 翌年ニ至り諸堂造営成○浅草寺三重塔落成○九月十七日後藤九代程乗卒 七十才

○十月廿二日連歌師里村玄祥卒○十一月廿八日金地院五山十刹諸山惣録ノ命をかふる○十一月廿六日増上寺大僧正 公命常住上方是請すと云

○十一月廿日片桐石州侯卒 六十九才号宗閑石州流茶道の元祖 葬ハ紫野高林庵に葬す

○勘三郎芝居にて大名題 四天王稚立 を上中下続狂言を興行す 元祖団十郎十四才にて初舞台を勤め始て荒事をなす

同二年 甲寅

二月浅草大円寺十三重塔再建○二月廿六日夜戌亥の方(?)に異雲東より西へ掛引て空中に橋を渡したるが如し
○八月西久保八幡宮門前の鐘楼造立(?)引導(?)松平某(?)寄附(?)して持く(?)成る○同月(?)白金瑞聖寺に経堂を建、蔵典(?)は此時一万版を収む○是より流布す○松尾忠右衛門今年薙髪して風羅坊深川に庵を結びて住し芭蕉一株を栽 世人芭蕉庵といふ
○十月七日狩野探幽法印卒 七十三才三田大聖寺(?)に墓碑あり 池上(?)の内遠[illegible]にありといふ
○同廿四日三井寺(?)等海僧正卒 名正(?)[illegible]出なり 谷中自性院に葬

延宝二年　甲寅

其(?)天下飢饉倉廩を発して窮民を賑給しめらる
○二月六日古筆了佐卒○二月芝金杉新堀に[illegible]寄る

○同四月十四日古筆了雪卒 六十四才芝心庵と号 葬所[illegible]あり
○九月木挽町山村長太夫芝居にて始て[illegible]續狂言を興行せし 此時の名題(?)[illegible]といへり 操りに[illegible]舞妓の始[illegible]延宝二年[illegible]宝町殿の[illegible]男女変りて[illegible]狂言を[illegible]といへり [illegible]六年舞妓[illegible]狂言を[illegible]古し

同四年　丙辰

七月四日五日風雨、家(?)東洪水○九月鉄炮洲築地出来て寛永寺(?)[illegible]勤む(?)[illegible]興行 一年不春(?)とも[illegible]
○八月十七日儒医野間三竹京師に卒 名子苞号静軒本朝[illegible]を撰[illegible]の始之云
○九月廿二日夜子刻増上寺文殊(?)堂炎火 本尊安置の所燭火より[illegible]しが一人身を躍して烟中に入[illegible]を捧て庭に投(?)[illegible]を背ふるの或は焼とし或は焼ざる[illegible]不見[illegible]あり又左足[illegible]して灰燼の中を[illegible]て拾ひ獲たりと[illegible]

接てかくのかしと云く　以上浄土護法篇の文を畧せ

○十一月七日暮六半時吉原江戸町二丁目より失火して西北風烈しく一廓焼亡ス此火ハ廓西へ焼出て本郷中の家ハいたりて焼る　此時抱女十二人焼死ス其後の後始て焼る二百余人の騒き其宅あらく商売す

○十二月廿六日江府に火災あるよし和漢合運に出　未詳

延宝五年　丁巳　十二月望

正月八日下谷池のはたに横田七郎右衛門の女子かなしき事を憂ひ嘆て雛又谷鬼子母神を祈てしに其男木村作右衛門小網町三又川にて今日鬼子母神の像を感得したり後七郎右衛門の妻男子を生む後翌年此像を本所本佛寺に安置せし

○七月中旬より江戸中町々踊流行し英羅をきて追ひ御制禁あり　家の一本に延宝巳の年いふ踊り老若踊るといへり

○八月六日大風雨に本挽町芝辺高潮上る

○江戸雀板行　七巻　○本朝遯史考一冊刊行　壺加為編

同六年　戊午

瑯頑上人奥澤村浄真寺九品佛安置　○東海道驛路鈴五冊梓行　継者未詳

○元祖歌舞妓芝居座元四代目市村竹之丞伎芸の誉ならびなく容貌も美麗なりしが故ありて無常を悟り菩提の門に入り今年廿五才にて剃髪し寛済発心して為讃法師となる是より舞納の日剃髪して舞臺より俗世を脱ひ諸人に落涙せしむる後に本所五ッ目自性院を再興し常行念仏を修して世に作の楽寺といふ　享保二年不寂せり　○十月六日狩野右京時信卒　六十七才

○同月八日古筆二代了栄卒　七十二才

同七年　己未

夏大雨大川筋に出水あり

○十一月二日浪人平井権八品川に於て刑せらる　浪人の部る而衣(?)いまだ但し異議波(?)の形(?)云ふ不幡随院の長兵衛を元廻て逃(?)しとそ同し時代にて(?)ふ人あり是は旗本あり(?)の人にして権八より名高し

○十二月十二日連歌師里村昌通卒　六十五才

延宝八年　庚申　八月至

正月八日茨木春朔卒　此英坊㧞次と号し大酒の業をあつめて酒戦を催しける人なり谷中妙林寺小石川柳町祥雲寺に墓あり亭海考江戸名所図会等に委し

○二月十日朝五半時より四半時迄近国夜のごとし

○京同(?)満重筆(?)師江戸に於て死(?)

○二月築地西本願寺再建成る　西本願寺今年旧地より築地にうつりて三月本堂建立ありし由或書に云ふ元和の頃浅草?築地へうつりて東向に本堂建立ありしよし寛文二年の江戸名所記に見えたり然るに延宝八年此時始て建立にあらず因みに云ふ今の新大坂町を花町と唱ふるは昔西本願寺横山町二丁目の東側にありし頃櫁の花を商ひし家多くありし故也唱へしとかや

○四月初日(?)婦(?)系(?)のごとし○五月林春斎春勝卒　六十三才

○六月廿九日俳人松江維舟卒　七十四才　名重頼　俗称大文字屋治兵衛(?)

○八月廿八日芝如来寺五智如来の大仏入仏供養あり　再建あり

○閏八月六日大風雨深川本所浜町霊巌島鉄砲洲八丁堀海上溢り上りて家を損し人溺るる事数を知らず櫓損し往来止る谷中法恩寺本堂梁折れて半傾く　乃翁(?)級再建のちなるを称く

本所辺一筋引く浩波ありて民家を溺らしむ

○十一月晦日酉の刻より坤の方へ広サ二尺長サ廿丈ばかりなる白気あり其根の星を長空星といふ十二月に至りて没せり(?)

○投桑(?)拾葉集成　二十三巻

延宝年間記事

永代嶋八幡宮は江戸を離れて参詣の輩も稀なりしに延宝のころより門前二三町のうち酒肆茶亭を許されて服(?)色の女を

めく〱汐崎の茶店もありしとあり此地も海中へ築出しける濱なりしが遠く房総の群山近く今城芝浦を眺望し佳景の所なりしとぞ此事は延宝の江戸図によりて照らすべし（此比別当永代寺大島を移さる）ありて今の所となし○あかる記二冊刊行（作者松次度源ヶ陽識の序を出さる草紙なり）

○南畝先生の假名世説に延宝二年の編笠町の河治と云ふ草紙を引て此頃塩瀬饅頭笹粽金龍山の千代がせし米饅頭浅草本の下おこし米白山の売方ぬつらべらぼう焼（ふの焼にして其表をうけてくろし延宝元年八月より堺町にてベラバウと名つけし吴人をみせものにすを色黒きふとこる之）八丁堀の松屋せんべい日本橋の一番方神鹿がちりめんまんぢう糀町の助三ふのやき本町橋のちくらとうの二官路大松大隈堂の源五兵衛漁（ままあるし）云々南畝先生云延宝の比の江戸の名物あつめりしせりと云々（按本に延宝町一丁目にして其家の看板尉と姥の木偶今に残りて商家の軒の上にあり）

○龕灯とて小さき蝋燭を灯しけむ（俵藤山若龕灯の位持参もしあり謎共のや九たるとある）らうそくやをしそ灯しけむ○此頃俳諧に江戸談林風といふ口調は田代松意一四友等より起りて盛に行はれ又蕉句付といふ事始りて行れ元禄八九年のころ又行はれたり○堺町に近江の丞かりいもてはやされて大おんなくする太夫（その時手文七尺へ二寸）又角太夫といふ小男を見せ物とす（用捨箱に見ゆ）

○江戸絵図は延宝の図をかけて最も古しと見る年来深川まで加へたるは寛文延宝の頃より始りしなるべし（延宝八年板行せる西の内摺大本綴巻の江戸図第二巻あり浅草橋通り尾町表紙屋市兵衛板とあり元江戸よりの図は寛永の頃市中に変じて是迄寺社といふ事あるへし此紙屋市兵衛板とあり是より前の図は寛文の比より寛永のころ市中の様のりのありて一分六一分五ヶ一分十ヶ一分十ヶ一分廿十ヶのりのあるよし）

延宝の江戸図に今と変りたるをいさゝか左に記す

佐久間町（今和泉町之宅寄下西在）新肴道丁（今天和の下）村松町（今通寺東三年目東）新石町二丁目

今の通り新石町之 二本榎 旧名追分にもあり 嵐穴 新田の臺下 新小田原町 三河町の俗称あり こんにやく町 新田
ちやうど丁の内 ちんきの河岸 一ツ橋より神田橋の辺を おせ橋 今のきうぐ橋 戸越橋 是ハ八丁堀へ渡る今弾正橋 表
二つ成橋 今云所三橋之天和旧年の問答あるちよう橋とあり 久右衛門町 向柳原辺今の甚 浜松町四丁目古名 法恩寺 上野清水門前へ入口
清水稲荷社あり 志づか丁の辺 同所門前の如く記せり 東叡山入口右の方に天神黒門右の池の
辺りく本郷坊あり 池の端通語地なし 神田やら上の門右の西側に在
浅草田原丁目側 せうすき町 今の神田猿楽町今澤町当遠一円に加州屋敷 清
部あり まさご丁ハ此所今の湯島横町の所にありしが後此地一旦明地と成すとぞ二十六
今の辺へ引る故に広小路中程ハ本地へ引出て本源寺弁中き数軒あり
しかし後まさ町茂くありて今沢町と以よ加賀屋
寺内ありし所両へ来るよべてあるべし 今の昌平橋を役橋とある
今の英町の所本多但州屋敷部あり 今の堀田原の所堀田對
馬屋敷部あり 友園橋際今の同朋町濱新地の所極木浦とあり
新古柳橋並く友恵橋は筋南の方かよべて是の辻番之あさけ先

浅船ハ本所辺船蔵前の通りより東の方く横堀にあり 今の某橋
もと元書所の橋とあり友恵橋南の方川中に屋形と記して一艘の大
船を画り 考 未 回向院山門あり 吉原にけんどん町あり
とあり寛保の頃 八丁堀る流引て武家屋敷の之 本所深川 吉原南の辺りに武家 一本にけんどん河岸
ゆるべし 猿炮洲十彩町 の所にあり
小湊町江戸町志水町和上町 寺の東あり 以前ハ西本願寺 羽生殿橋 今の海城 橋あり 白金
瑞聖寺境内に蓮葉の形したる池あり是より彼の濱あるを画
あり芝井町出入海手に残屋あり赤坂氷川社根津権現社ともに
同地にあり音羽町遠田圃なり亀戸天満宮向残在之 深川戸
猿丘屋丁後方に丁出方町新丘丁須左衛門丁地あり越中
島ハ柳原越中屋敷部あり 永代橋八幡宮海中さし出ありて是
果岸る橋ハ此に入海にて永代橋に對せり

天和元年辛酉　九月廿五日改元

二月高田に護国寺創剣　上野国八幡別当護国寺住持法印亮賢僧正開基　五月院家と成る

○浅草川広がる○法坐飢饉(きゝん)○山王神田の祭礼隔年となる　是迄は毎年なりしとあり

○日蓮上人四百年忌　法華宗寺院法会　○十一月廿八日丸山本妙寺より出火本郷駒込焼亡○十二月廿八日川田ヶ窪より出火して四ッ谷赤坂麻布三田芝牛町に至る○今年両国橋掛替あり矢の倉南脇より東所一ッ目の橋際へ渡る仮橋を設く今の所を元の所といふ十五年の後元禄九年より今の所へ経営あり

延宝九辛酉年卯月廿五日　大矢野刊

同二年　壬戌

二月六日市谷にありし護本山天龍寺類火に逢ひ翌年四谷へ移さる○二月廿八日俳人西山(にしやま)宗因(そういん)江戸にて卒す　七十八才

○三月俳人石田未琢(こたく)卒　未得の男なり○四月琉球人(りうきうじんらいへい)来聘　正使名護王子

○四月十七日明の朱舜水(しゆしゆんすい)先生駒込にて卒　年八十三　常陸久慈(くじ)郡瑞竜山下に葬る○四月廿九日将狩雪信卒　四十才　探幽女

○七月俳諧師未木頌庵　石田と云る　俗称　平三卒

○七月二日大雷千駄谷に墜(おつ)○同二日落合泰雲寺(たいうん)寒山白翁禅師寂す○七月諸職人浄瑠璃語(かたり)の類天下一(てんかいち)の号を停(とゞめ)らる○同月屋形(やかた)船の寸法法定あり○八月朝鮮人来聘　正使尹趾完副使李彦綱従事朴慶俊

○九月安宅丸(あたけまる)御船を解ひしそのまゝ本地を旅(?)放とす○九月了翁(りやうおう)道覚東叡山内に地をたまはり学寮(がくりやう)を建て不忍(しのばず)池中に蔵経(ざうきやう)を移し経堂を建つる○青山播磨守家来長谷川某古銅仏阿弥陀像を安置す　寛永十四年大坂より　昔東本願寺の内にありしを大坂

城中へ移されしが落城の後江戸へ持来り今村某が八丁堀の居宅にありしを常光寺住僧念和尚に納して今年九月送る所也とぞ

○十一月晦日戸田茂睡が男保貞が亭にて墓所浅草金龍寺に於て武府を去る向井去来辞世の詩茂睡が追悼の哥人の詠る所也へのせたり ○十二月廿八日未下刻駒込大円寺より出火本郷上野下谷池の端筋違門神田の辺日本橋まで浅草浅茅同所の瑞の林町辺迄の佐倉友円橋焼落本所深川に至る半分を焼失せ 此火事に遇って財宝を失へるもの或は焼死溺死人不数しく天神の夜死人多くさ遺るは悲泣のさまを哀憫して学寮の子弟塔頭年来所縁を立書籍の料一千二百両の所を分与人に施せりこの時池の端仲丁新学寮の市店土蔵に火入りて多年求置ける内外の書籍一万巻余焼失せりしくはり深川の芭蕉庵も火にかゝりまれ翁も潮にひたり畑中をのがれしといへり時のさまなり 此火にかりて後本所士民の家を排せられ採るもの町屋を払せられ採る場となる元の田圃と成る○湯島は町屋を払せられ採る場となる

天和三年 癸亥 五月至

正月元日大雨洪水○正月車長持を禁ぜらる 火災の時乃ち路の妨となる由なり

○二月六日市谷より出火○二月十六日牛込より出火

○武者小路実蔭公江戸下向 旅中の詠日記を立てられしとぞ

古さいつも其の詠来は乞へ旅として家の記なれども今はなし

○本郷駒込に於て

○三月廿九日駒込片町八百屋久兵衛が娘お七火刑に行なる 今年十六才とかや世人の知る所なり十二才の春松竹林の二字を出せる横家を出しまの所駿に揭げる公にありこのお七が寺中七百文のまゝりし子なる由いゝ名つけしと云墳墓は駒込吉祥寺にありと世の哥舞妓の狂言再演せる所なり外に鈴木正三の舞台の図の小石川蔵寺の祖師堂にうけたる生霊抜き山法華寺宗門に云ふ然るに八百屋娘お七十一才の事跡と延宝四年辰年二月と出す又同年十月お七火刑は天和二戌二月とあるはいかなり

○夏江戸大旱久○六月六日玄蕃家中内寺 雲霊一葉居士と申す諡にて駒込海蔵寺の墓あり耳塚に手をあて法勇の人ありしとあり

○雲光院本堂法号に深川勧する所の墓あり

の焼後本所神田の辺より深川へ移る谷町の北にありし新所を駒込へ

る○十二月五日江戸焼 合考ニ出 方角未詳 ○下り竹斎物語梓行 斎藤徳元作或烏丸
光広卿作と云正保某の妻の
此の編もあるを今年梓行せるなり
○紫の一本写本成 戸田茂睡作

此年間記事

安宅丸の御船を解せられし時其余両河岸に有りし古船等を渡
大船を造らせられし川の東岸の地へ移させらる
○大屋形船を停らる東国丸 浅草橋 大船始之 井田市丸 井田一の大船 熊一丸 戸田九ヶ月 岩不一月 江戸
山市丸 日本橋の船之名 八ヶ月 岩不一月 内上 分て大船あり先游楼船の名家の一年江戸
町にて拾遺其中にあり
事跡合考云天和の頃小山田弥市所といふもの請人の金銀を借り
奪ひ元禄八人まても殺しけるか其八町りご不隠其夜八川筋并
楼船にて抗金銀を取りあつめのとて大屋形船
町奉行遠を止めに所々において元禄中流罪ありしとぞ
○俠客源見十右衛門遠流に処せらる十八年を歴て宝永中帰参を許さる
○千川上水出来るハ延宝天和の頃なりし板橋の南の方練馬の南

のうなん井の池の方より来て浅草及ひ柳原筋にて流しある
流を千川上水と云ふ享保七年止まりて止むなり又同し頃本所の内竪川
川の水流を業平橋筋に引て又本所中に掛しかるを白堀上水
といふ是も享保中停らる是上水の川筋今も業平橋の東北の方
の橋際より葛西郡世継村の方へ通りて小川ニ流あり是則ち是白
堀上水の筋なり 以上事跡合考に出
○神田永富町の地ハ佐竹家皆川町ハ対州家の屋敷にてありしか
天和中佐竹家ハ下谷へ引けて其跡町屋となり永富町と云対州
家ハ松平下総侯の屋敷となりしか後宝永の頃町屋となり皆川
町といふ松下町代地の所も元禄頃まてハ吉田摂州侯并尾張家の
中屋敷にてありしなり○此の頃土佐節浄瑠璃流行

○天和中浅草寺経蔵へ商人の荷物を入置し所より失火して焼亡し後再興ありしとぞ

○業の一本に日本橋一丁目塩瀬が隣稀町ふの西紀八助といふもの
はじまりける池のちさのねん安黄蘗本下て場の首黄蘗茎の
陳三官唐館坂田町の宝庭が温泉云ことあり此時代のうへより起ある
べし ○此頃さかりし順比丘尼の内耶田町多町ありより出づ永
玄如此ますい川出彼といふ名より出てありしとぞ吉原にて羽二
重の揚頭巾をかぶるよりてこれを繻子鬢とかつ出さけり又
寛永の比まではありし総髷といひしも土妓にてありし

○此時代に祇山霊山が書行る 一年小村氏とて霊山は肥後の浪士の産にして
伝三立と号し加藤家の侍医あり加藤家の闕
後に細川家に寄寓す父は三立も又細川家に仕へ生父三立も学了兄まての長崎に
往し帰へ人に会して霊山も初より学ふ父子ありひし帰へ人より換法を伝授して能筆

の後元あり黄檗隠元師の出現独立も一山と方外の友としてこれを世の事は不同
とあり或とき独立曰く人ごと書ても筆力精神霊山に及ぶ人はいまだなしといへり
独立あり彼は三立あり二立足しと謂て滑稽しけるとあり霊山江戸に来り黄檗の僧
と同伴して青山海蔵寺に来る後宝町浮世小路に偶居し時に延宝年中なる
べし門人五六輩あり廣沢も二生二人とらいしくは二老男傳にあり
二老とは霊山廣沢の二老なり文を世時人傳にもいさゝかその傳を載たり

○池乃端錦袋圓行る 勧学院の了翁僧都は羽州の産なり幼より仏業に従ひ一代
蔵経を寄附せんの志を発起し難行を勝しけるが寛文
二年に至り去年より燃指をせし一指痛みて苦しみ居るに夢中に黄檗の隠元山
定禅師より薬法を授り然に平愈を得たり其夢の内より教へしてより授けし薬を
とて錦袋圓と号し後東叡山の林麓に表七間裏行廿二間の市店をひらき此薬を
ひさぐ彼に志ある者其料を以て蔵経を求む其功ある事を思ふて江戸へ来て五十八余
かくても似せ薬を調合して売りける者ありしかば其事を知る翁に告て云是を防がんは己が下
を養ひ市中を能細して売りしむ或人これを聞き翁は大慈悲の人なり是等の
の薬は行く廣まるべし若廣まらば大乗の志なり翁は大切なる法なり是を防ぎし
我の本意は諸人を助け救んが為なり若似薬これを売て妻子の養ひとせば是又
本意の一ツなりと或人又曰若彼が薬人に益あるべき料は汝が不功徳なり翁曰
日月は果の地に落ん事も天に任せと同意殺圏にして夫に大慈なりとぞ

貞享元年甲子 二月廿一日改元

正月晦日彼岸令改定 ○元三大師七百年忌

○知足院を湯島へ移し給ふ舊地ハ神田の東にあり
○弘法大師八百五十年忌 ○正月廿日古筆二代了祐卒七十才
○東福寺七仏薬師を下谷より麻布菜窪坂へ移る
○九月廿二日官医岡本玄琳卒麻布祥雲寺に葬す ○九月大風家屋を吹倒す ○十二月囲碁師安井算哲天文職に補す算哲は天文に委く改暦の事を司り貞享暦七巻貞享暦法通書五巻を編述せり ○甲子江戸鑑刊行松會寿板武鑑板行の始とす
○來世改暦頒行但官版暦を改め頒つ

貞享二年乙丑

二月廿二日流星東南より西北へ光を放百里を照し轟く聲ありて空中響あり雷の如し ○芝三田魚籃観音開帳浅井了意この頃なる縁起を述して此縁起あまた世この観音を三田の山號にうつしてもてはやせど ○五月深川子福島寺薬師如来開帳このとき十二神將の像あらく不造立なる ○日暮里諏訪明神社造営 ○六月浅草寺智楽院別当を止め東叡山御兼帯と成る ○九月四日狩野永真安信卒七十三才 ○十一月霊山寺再檀林と成る此時浅草にあり元禄元年本所へうつる

○同 三年 丙寅 二月改

正月一日古筆三世了周卒 ○閏三月利根川西を武蔵とし東を下総と定め葛飾郡二ヶ所に分る古は隅田川より東の地は下総葛飾郡にて上代武蔵の内なりしを中古下総に属せり今年舊のごとく武蔵に属せしめらる ○八月服忌令出る元禄元年又同八月追加又同六年九月追加同七年正月追加あり ○九月品川御殿破 ○九月小石川白山権現祭礼始る ○九月大小神祇組と号しける悪党を誅せらる神祇組とは盗賊を語ひて二百人余に及ふ又仁木組とする人有事なり罪科に処せしめる

同四年 丁卯

二月十八日より浅草寺観世音開帳 ○同寺二王門前へ銅観世音勢至像建立 願主上州邑楽郡館林の産宗誉濤直房俗姓下総井上氏…発起のよしにて建立

○江戸惣鹿子七冊梓行 作者藤田氏

○七月廿二日より廿六日迄本所において宝生太夫勧進能興行

○女用訓蒙図彙板(にょようきんもうづゐ) 此時代の風俗見るに足れり ○三田実相寺貞女塚念誉玄愛

正伝 女貞享四年丁卯十二月十二日とあり

是は深川東漢町に住る…娘なりしと云 家に在て父母に孝あり後 夫と離るゝ事ありし…

ある村田何某といふ者に嫁して貞操あり不幸にして早く夫に別る父母再嫁の事

を進むる事頻なりしかどもきかず食を絶し日をへて終に死す 風聞を聞し人々

感じて…その貞操を称せし

その貞操を表す為にあるなり 三田丹実相寺二ヶ寺あり…町寂照山実相寺

のうちにあり

此年間記事

貞享元禄の頃より市谷新屋敷へ武士屋敷追々に下さる

○貞享中洪水ありて六郷の橋流るゝ事ありしといへり 武蔵志料に中古田中丘隅宿駅(きうぐ)の説ありとて船渡しにせしといふ

同書に云中古江戸の三大橋と云は両国千住六郷の橋をいひしとぞ元禄の頃老人の話にもありしとあり

と云へり

○駒込光源寺大観音造立 江戸の町人丸屋吉兵衛寄進之 此時弥田の連雀町に住す

町屋表を求て当寺に寄附し今に香花の料に宛つ ○千解通し(せんどくどほし)江戸にて始る大門通り竹屋喜兵衛

といふものゝ工夫にて発来しといふ

○此頃河村随見(かはむらずゐけん)南新堀一丁目へ移る 霊岸町へ入る角より…二十一家

…仮居より河岸に土蔵を構へより

川岸まで…表門は新川へ表門は浜町…

居宅瓦葺土蔵造なり…瓦葺…

…随見の…の新田を…

…

○貞享の頃より大森村の辺にて海苔(のり)を製す

○此時代の江戸図浅草花川戸を船川戸とあり

○好古日録云　婦女の着く用る笄ハ貞享年中御厨子所預り故従三位宗恒はじめて工人に作らしむ後終に十数年にして宇内尽く弘まりたりとあり

元禄元年　戊辰　九月晦日改元

寛永寺前の地ハ元の如く武士方家町屋をとくさま野品の地となる
此所より本の西へ隔りたるとて本所と称す　此辺の出来るに及びて吉川氏の定を引て筆す
○浅草霊山寺本所へ移る
○九月神田明神祭礼神輿練物始る　御城内へ入る
○十月二日儒師西山健甫卒　名順泰坂本　養玉院に葬
○十月十八日連歌師里村昌程卒　○十一月神田橋御門外に知足院を移さる是護持院となり乙亥年より改て筑波山護持院元禄寺と号す
此時湯島より移り其寺跡ハ同八年浚堀して御用地に命せらる

同二年　己巳　正月閏

正月十二日儒師今井弘済卒　号魯斎本姓　春桂寺に葬る
○正月十六日同日老人星現る　老人星ハ寿星なりの瑞ありと活字　福寿をさとるの星なりといふ
○五月十六日雨天二十二間堂にて浄土家の臣福井流兵衛矢員五千二百六本を射て江戸の天下一と称る
○十月婚姻の式あひせ御制禁あり
○十月廿五日夜異星顕るの方にある　○十二月北村季吟翁并男湖春召出され　御歌学方の始なり　同七年法印に叙す
○江戸圖鑑綱目板行　画工石川流宣撰之　絵図一枚本一冊　○再訂江戸惣鹿子板七冊　松月堂不角編

同三年　庚午

二月虎之門外左右の町より汐留まで大工町より元材木町まで

広瀬とよぶ長崎町の広瀬を廃す（長崎町の跡広小路は南鍛冶町と桶町の角より南大工町とよぶ）鉄炮洲築地海辺に屋宅を建しむる（火災の防のためなりとぞ）
○同月十五日不忍池辺に蓮華庵不空無上人万日念仏会満散数万の信群集し十念を受て手書の名号を乞ふ事夥し
○五月谷中感応寺（今天王寺）丈六仏建立、[illegible]
○十月浅草寺中別当伝法院にて成 ○鵞峯山人文集成（百廿巻）
○十二月十七日金杉工横谷宗与終る ○東海寺の方間修寄棟[illegible]（寺を品川下楼 菱川師宣画 この外の坂を昌平坂と改る）○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟（是まで忍が岡にありしを今年この所へうつし給ふ）

元禄四年 辛未 八月望

正月湯島大聖殿御普請成る（上野よりうつさる此地元来は林家の持地にてありしを此度新たに十哲の）

孔子を始として七十二賢并先儒の像は画工狩野洞雲是を画く 二月より普請始ありて
同十一月竣功ありて後湯島町は此所霊地の地広からざるにより今の所へ代地を給りて移さる之 二月より
相生橋を（古名一口橋）昌平橋と改る

頌大成殿新落　芝山

登々昌平坂巍々士山東斯度斯経始倏忽成廟宮棫功
依勝地荘観聳清穹畫棟麗輪奐鱗甍真玲瓏四配玉床
下雍容珠箔中三才抵太極六経定折衷禮楽学雅飾文
教克磬襲山知仁有楽川聆道罔窮時否欲浮海栖々帰
魯門豊祀誠如在吉蠲捧芳樽神明永隆監國祚齊乾坤
春入舞雩節化雨澤黎元

○同月麻疹流行 ○同九日俳人一柳軒不卜卒（本所法恩寺に葬）
○同十日俳人福田露言卒（六十二才）○同月碑文谷法華寺谷中感応寺
市谷自証院法華宗悲田派をあらためて天台宗となる七月日蓮宗

和田派の僧俗互に論じて流さる ○今川橋より小川始て堀割る

○六月十八日紀州根来宗山覚鑁上人来年五百五十年忌に付大師と諡号をたまふ ○七月官医半井卜養罪ありて伊豆の三宅へ流さる ○八月湯島霊雲寺建立あり（開山浄厳和尚）

○十一月十九日茶人清水動閑卒（号瀧紙庵牛嘉 江府[?]に葬る）

○慈済庵空無上人勧化して造る所の金銅立像の六地蔵尊完眼ありて江戸六所に分つ（寺院号并縁起等東都歳事記にあり）

○俳優水木辰之助狂踊行はる（五元集 辰之助物まねを見て　すさましや諸人のまねする狂踊　其角）

○骨董集に云、元禄六年京下平大張子を引て、了意大徳晩年に及んで筆力ますます老健なり。元禄四年寂せしとあるを浅井了意の事とおもへる[?]は柳亭翁の説に此時代了意といふ人二人あり、浅井了意は俗之、今一人の了意は僧なり。但し甚遠の事なりしといふにや、浅井の了意は今俗なりと[illegible]さまで大徳とあるを見れば、八少も僧の了意なるべし。柳亭翁は筆記にもありしなりんを、泉下の人となりしとぞ、問ふよしなきこそ本意なけれ

元禄五年　壬申

正月元日未申の時日蝕（七分半） ○浅草寺観音堂造営

○大塚護国寺観音堂御建立 ○六月五日より信州善光寺前立如来回向院にて開帳（本田善光夫婦子息三人の像 此度開帳に付江戸にてつくらしむ）

○八月浅草寺[?]弟子同大久保氏忠宣父母と倶に鎌倉にあそび扇ヶ谷善光寺の境内にて五寸あまりありける鄭[?]の藤木をとりて帰り牛込長命寺に栽ありしに近年不思議に成長して三丈余に及ぶに至りの今に至りても繁茂せり

○九月浅草川諏訪町より並木町[?]まで殺生禁断の高札を建らる

同六年　癸酉

其作乃法然上人自作像江戸に来て開帳（本寺院　京洋）

○正月儒師鵜飼錬斎卒（名真昌称金平　駒込竜光寺に葬）○夏中馬の物を云ふ世上に疫病流行る事を告るとしの妖言一般の噂とありてこれを除く薬法の書物を梓行せしもの共て此妖言を言ひふらせし者ともを刑せられしと聞えし

○五月鷹匠町を小川町小石川餌差町を安藤坂町と改る

○六月廿八日俳師其角三圍社に於て雨乞の句を吟ず（寺嶋村老父峯一堂乃記を引ておもふ天下旱魃にして田面乃ち白しに其角雨乞の句を作り須臾にして雨降るといへり此事当社に詳くしてあり）

○七月新大橋成（両国橋を大橋といふに対して新大橋といふ元禄五年の冬深川大橋なりかゝりけるとき「初雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉　同しく橋成りし時「ありがたやいたゞひて踏橋の霜　同　華送の折にて一瓢牌も　其角　木の葉も露葉らる）

○八月廿九日其角か父榎本東順卒（二本榎上行寺に葬る）

元禄七年甲戌　五月閏

正月八日狩野洞雲益信卒（上野護国院に葬）○正月廿九日本所川東深川焼失（亜張再建あり）○六月湯島霊雲寺関八州真言律の本寺と成る

○六月廿六日杉山検校総一寂（八十余才　弥勒寺に葬）○七月浅草大護院に移して八幡宮を勧請せしむる（一説に元禄五年とも云　此寺の昔は文殊院と云　此後大護院と改む　其後安永年十月十六日羽山光生寺弟子を含して諸像あり　と云ふる文殊院は別当の事なり）○八月正覚山月桂寺十刹に列す

○八月晦日小堀政尹卒（七十才号蓬雪称権十郎遠州侯次男にて　深川浄心寺に葬す　墓の不分明なり）

○深川宜雲寺寂剣（世俗云一蝶寺なり）○高田穴八幡宮社地に永宝明神を勧請す○江戸名所話板行（七巻）

○増上寺廿二世貞誉上人大僧正に任ず是より代々大僧正なり

○十月七日奥澤村浄真寺開基珂碩上人寂（七十七才）

○十月十二日芭蕉翁浪花(なには)に寂す ○十一月十五日䔍人山名玉山卒 名武豊 市谷谷町道照院に葬す ○同十六日吉川惟足翁卒 七十九才

○十一月新吉原大門口へ高札を建らる

元禄八年 乙亥

二月八日未刻大風にて谷町より出火芝札の辻海辺まて焼亡

○三月俳師谷一㳂卒 名松亭号巳千沼谷長谷寺に葬す ○柳原揃貞稲荷の仮営境内掛て流行 ○五月官医余語(よご)古庵卒 八十才号延 深光寺に葬

○五月黄檗隠元師に国師号を追諡しめらる

○七月護国寺正僧正に任す ○八月朔日本所羅漢寺入佛供養あり 五百羅漢像を排列す是松雲禅師自ら功化して刻まる所なり法考像數八大くく黄檗山の僧刻あり

○九月明の人心越禅師寂 水戸祇園寺に葬す禅師開基の寺なり

○金銀を吹直さる九月より通用有しむる 元禄金銀元字入金銀といふ年代まてとしを吹く

○十月中野に犬小屋を建らる ○十月十六日東叡山二世公海僧正遷化 寿八十九 ○十二月数寄屋橋辺より出火新橋まて焼亡

同九年 丙子

○永代橋始て掛る 百十余間之大橋のかゝる事なり船渡しにて有しを元禄二年の頃大渡し也 黄金の事橋を永代橋と云ふなり武蔵下総元より永代橋始て掛 あり 附 此橋をうけ 大夕よりふの月 涼冠

○正月十四日宮僧人見友元没す市坊に卒 名節 号竹洞

○四月牧野備後殿寄進鐘(おほがね)を鋳せしめ羅漢寺に納らる

○五月廿四日上野中堂本尊薬師如来江州志賀郡円山寺より迂させらる ○同廿七日十二時日光月光像出羽山形立石寺より移させらる ○金銀箔度を定らる

○六月十九日大地震 ○十一月十六日東叡山中凌雲院前大僧正

武江年表巻之三

遷化 訓点法師悦尼多く上木せしことを世に益ありといふ

○十二月十二日水府侯儒臣平野雪蘭卒 八谷中本行寺に葬る 碑文六年山縣作る

元禄十年 丁丑 二月至

五元集拾遺 大小の吟

大ゝ庭を二まろ四く六くも八く九ゝ十一襄十二 師走この春 其角

○正月十五日北村湖春卒 五十余才

五元集 湖春をいたみて

泣ゝくよむ須磨もあり哉と 哀 其角

○正月法然上人に圓光大師の諡号をたまふ○亀戸村にて銅銭を鋳させらる

○下谷五条天神今の所に遷 首へ上野山内にあり後坂本に徒居ありしより今年移されし也 昌平の宅地也

○酒運上法定○五月八日より新大橋に於て宝生新之恩

勧進能興行あり 宝生大夫 助々を勤む○六月武家令通用始る

○同月暦問屋十一人に定らる○七月より護国寺観音堂護持院

大目堂法ゝ建立○九月亀戸天満宮神主の法式白川吉田に従ゝ

ざ寧府の例に准るべき旨 勅許を蒙る

○十月十七日大塚上の町より出火麻布小日向牛込田安広ゝ伏見町

まで焼亡ス

飯田町世継稲荷の地は年迄須君の藩中の諸士あり夫より後町屋と成科乏 延宝の江戸絵図にも坂の下より飯田町となりてあり

同十一年 戊寅

正月十二日画人桃田柳栄卒 名守光号幽霄斎 池上本門寺に葬

○二月川村随見 百乃さま漆藤を命ぜらる天和二亥年 享甲子年

ゟ大坂川々治普請を命せらるゝ切ゝ江戸に帰りて卒すと云ふ

安治川も此時成きり○五月小石川御殿造営
○六月九日医師板垣宗憺卒 俗名今瀧ち千葉をゝ
名恭号東皐 高輪東禅寺ニ葬 ○七月深川海手一万坪を築立らる ○七月儒師岡井碧菴卒 郷濟と号
○七月廿二日新堀白金御殿まで堀しめらる
○八月朔日永代橋今日より渡初成る
○八月東叡山根本中堂文殊楼二王門并山王社 今の地へ移さる 御建立
廿八日中堂入佛あり 九月三日供養五日より諸人参詣をゆるさる 江府の寺社一時に輻湊し山門院を立るの地もなかりしとなん 門前の町屋をひらき広小路とせられしもこの時なり 本永町八軒町六軒町車坂町のうち并に柳町黒門町まで元地せられ 外田と成の深川代地をたまはる

南郭文集 東叡山瑠璃殿

一旦經営結構新、入門何處避紅塵、千樓金殿高多少、不庇貧民七尺身

○九月六日瑠璃殿の勅額到着あり 此勅額ハ持明院基時卿書給ひし所なり 門主中堂の竪横の丈尺少しも違ひなく 量りて先二重の枠を作木を以て造り枠ちに而に榜影板を以 白紙を以て文字を施し 識きて能く其のひろさを清書して 勅質に備ふ 御入筆ありて後彫刻し漆塗金箔を施 金具を調へて叡慮厳の書に備て出来せしとかや
○同月己卯新橋南鍋町より出火南風烈しく大名小路通町筋 外田下谷上野浅草山谷千住掃部宿まで焼る 元三 此時浅草
廿三日又焼亡して元禄十六年より深川木場教寺前河岸縁辺
河岸八町の道路十五町と成る ○二度此邪社坂本にありしを東叡
山中堂前の所浅草田原町へ移る ○十二月十日本石町弐丁目より
出火日本橋霊巌島八丁堀鉄砲洲佃島まで焼る日本橋焼落て
人多く死す ○十二月西五日潮溢漲せしむる 旧十六才其人抜町一丁目新井不絶し時あり
○十二月廿二日儒師木下順庵卒 名貞幹 称平之允 千束村に葬る

元禄十二年　己卯　九月至

両国横山町續矢の倉去年災後今年二月西門跡の東南此邊へ屋へ移されしより此所へ享保の頃浅草新堀へ一所に移されしといふ 矢の倉跡の町は町屋に成とあり大方は米沢町と成と云り矢の倉の地は寛永の頃より十町とあり薬研の頃より六町許なり矢の倉といふ是は米蔵の跡に建し矢の倉なり 一説八の倉といふといへり旧薬研堀と記り則矢の倉あり近き頃まで記せり按に古は丁目も有しとあり久しく薬研堀は八ッの倉ありし故八の倉といふといへり武江志料に云柳橋ハ柳原の末に在り世に所謂柳橋といふハ难波の南薬研堀に架る橋を元柳橋といへるに對していへるなり此橋ハ难波橋といふ此所ハ古く両国橋の所にありし也元禄の頃といふ元は今矢の蔵へ行元禄の古図に有り是より以後矢の倉を引きてその跡に鶴氏の居宅と成る故に今に至りて是鶴河岸の名残有り又今ハ此に鶴氏も宅を移して五倉の別荘とあまりて鶴氏の支流此に其地に在るのみ是久しく見る事なし後明らかに時代しるしその今陸の所に住むのまゝ其まゝる事にて記し近頃まで

○二月祐天和尚生実大巌寺に住職○四月四日浅草橋辺より出火筋違橋まで焼亡○四月四日後の小角千年忌法事

○八月十九日大風○九月六日川村随見卒 号正岩天然寺開基

同十三年　庚辰

二月下谷車坂より出火浅草辺迄寺々残らず焼亡

○護国寺にて城州嵯峨清凉寺釈迦如来開帳 四月廿七日下向ありし也 嵯峨の本尊五月より開帳始り ありし日数ハ八十日の予定なり此本尊江戸始ての開帳にして參詣群集夥しかりしとぞ 此とハまつれひのまひ下向せしと云角

○永代島築地六万坪成○八月十七日より葛西飯塚村(ゆみがね)観世音開帳 出現より二千三年目にて開帳○深川佐賀町今川町の辺にありし材木問屋六万坪の地をたまはりて移る今の木場なり

○次木辰巳嶋山村長者文左衛門居宅にて七変化の不思議をなしむ

同十四年　辛巳

正月元日卯辰刻日蝕八分○武江記云永代橋の辺に大河内(おほかうち)何某殿

法座数ありしが今年正月元日玄賓八何の故とも知らず女の首
級ありしを人々怪しみ思ふ首は人の頭を得る年武門の祥瑞なり
とて是をまつり霊宰地神と崇む 世人誤てれうちんとよぶ 後に何の故か遊女の
尾の社なりと云ふらしめ今も永代橋の側に小祠あり
○二月十九日古筆五代了珉卒す 五十七才 ○二月天満宮八百年
法楽来年本所亀戸村亀戸社に於て詩哥連俳興行あり
又元集 其角の句 松梅やあらむ年も八百本 ○二月京真如堂太秦寺子江戸にて
開帳 来祥 手毛院 ○三月十四日浅野家吉良家事あり一日之世人の
知る所也文言賛せしむ ○三月麻布御殿初て成
○三十三間堂深川に移建立 五元集 新く三十三間堂 若菜やきのふの弓の 其角
○深川洲崎吉祥寺開創弁財天を安置す 開基弥兵院 隆光僧正

○凞陰寺にて本所法恩寺の非人小屋を建る
○十二月和人冬長谷川安清香奥座役法の二人へ篤ひ
御免あり
元禄十五年 壬午 八月改
二月十一日四谷塩町より出火青山麻布芝浦品川まで焼る
此の時麻布御殿品川御殿妙法寺五重塔二王門焼亡 品川御殿再建
おしい妙法寺の塔も是より絶しとかや ○二月十五日日本堤の上に待乳院を立る
○去年より葛西飯塚村夕顔観音江戸茶道より参詣群
集する事夥し 村長の家より麦茶の菓として出せば勅あり
とて法人を求む 又江戸所々の寺院へも五七日つゝ出て開帳せりしが其地へも来る事村内の如し
○天満宮八百年御忌 西行上人五百年忌 宗祇法師二百年忌

国立公文書館
National Archives of Japan

○四月高田稲荷霊告あり桜の根より霊泉をわき眼病を患ふるもの洗ひて験あり（恐れあるの名なれば然るべしとぞ）
○六月廿七日湯島霊雲寺開山浄厳和尚覚彦比丘寂（世寿六十四とぞ）近世の碩徳と称えし ○閏八月廿一日歌人北村正立卒（季吟の二男なり谷中瑞林寺に葬 玄妙院）
○寺島村百姓惣右衛門が娘此地の叢中より不動尊の像を得て成田新法白山寺に納む（成田不動尊居所の中に埋れありしが出現の告ありし由堂に安置すといふ）
○貞徳翁五十年忌（霜月十五日墳墓の前にて 華解も花さく花のむかし哉 也角）
○十二月十四日浅野家の義士四十七人本意を達す（寺坂八人口不詳 免れるとて）
とうけ いまだ

元禄十六年　癸未

二月四日浅野家四十七士自害泉岳寺へ葬る
新井子某帆宮殉死 重ねの身へむしろ打ちかけ 子葉は紙に 接にのむ茶屋もあるべし死出の山 右は本所両国にて義士の事を記せるものあり 引用の書名のこと
交不挙

赤穂盛衰　赤城紀談　介石記　返加介石記　介演記
新撰大石記　槿花集　赤穂忠臣記　武家明鏡記　易水連袂録
義人録 室直清　忠士筆記 浅見安正　山科の密書　忠義碑文 忠義碑の三字八十余 右大臣忠平公 中津侯 三字九十部 偉明作
補不論　瑞光院記　義士考　義士伝
蓬窓記　鳩秀記　義士文通　義士絶纉
春嵐東 赤穂四十六士論　鈴木忠臣蔵　赤穂義臣伝 享保巳亥 片島武矩

○二月九日儒師松田晩翠卒（萬谷寺雲寺に葬 了然尼の夫なり）
○小柄原日慶寺再興 ○三月麻布赤坂辺焼亡
○四月廿一日石川筑後守殿の臣梶川與五兵衛の子勝之十二才にして深川三十三間堂にて矢数を射る（暮方より翌日午刻迄半堂惣数一万二千三百本 通矢一万一千本を射る 其ころ賞美する事甚し 後に是の若年ながら差廻りのあひしが八丈百隣なを射させりしが八郎左衛門の男子孫をあつりとあん村山三五兵衛と云人の門人也）
○五月廿五日西久保天徳寺門前吉兵衛が妻三人の男子を生む（三助 伴助）

恵助と号す三者
変のころとぞ
○十一月十日儒師坂井伯元卒 号渉軒 駒込 竜光寺に葬
○十一月廿二日宵より電強く夜八時地鳴る事雷の如し大地震
戸障子たをれ家ハ小船の大浪に動くが如く地二三寸より所によりて
ハ五六尺裂割れ砂をもみ上あるひハ水を吹出したる所もあり
石垣崩れ家蔵潰れ穴崩れ揺(ゆり)あげ死人夥しく泣さけぶ声街(ちまた)に
冒(みちみち)し又所々毀(こぼつ)る家より失火あり八時過より津浪(つなみ)ありて房総人
馬多く死ス内川一まハり品川に沈没あり此時より数度地震あり
甲府及小田原ハ別て夥しく死亡の者凡二千三百人小田原より品川迄
壱万五千人房州十万人江戸二万七千余人 内廿九日火災の時永代橋にて死たりの者七百三十九人といへり
ありしよりの小揺り此時深川卅三間堂倒る廿九日夜より 火
あり晦方に及て地震止む去ながら十二月まで震ふ事志げくあり

深川辺永代の島までも焼たりとそこの御代の亡所 亦そこら 中院通茂卿
○十一月廿九日朝大風本郷追分より出火して谷中まで焼又小石川より
出火して北風に成上野湯島天神下霊雲寺前遠藤向柳原浅草茅町
東ハ神田より緑る町小舟町堀留小網町本所へ飛回向院の辺深川
永代橋まで焼亡す 焼死の者 溺死の者 万余人を葬る墓を世に地震火事
といふ○回向院一言(ひとこと)観音像山門に安置し又も十一月霊夢の
告ありて楼上より出るも廿二日夜地震の時山門出て倒れつひて
廿九日の大火に諸堂焼たり然れども此尊像を抱返てつつがなし又より
諸人信心いやまして参詣群集せしとぞ 一云銀杏より入一云移り焼せし てまた会我叶やといふことといへり
○此火事に俳人北枝が家焼たり「焼にけりされども桜さらねうち 支考
梅が香やまつ一番に焼見舞 牧童

此年間記事

元禄の始杉山検校信都江の島弁才天の霊験を得て鍼術の妙を得本所一ツ目に地をたまひし此地へ弁才天の社を営む（今に至りて元禄の）

○雑司ケ谷鬼子母神参詣群集する事始る（江戸町人伊勢屋武兵衛といふ者社を再建す）

○白金覚林寺宝剣（加藤清正朝鮮王の連枝を連来りしか入把浄宗／本所も宝山と成りすへ高山宗基と成日延上人と号）

○湯島本百楽山風閣寺宝剣（高山派解脱この時は湯島天満宮の下にあり／後今の霊雲寺の東へ移りしち後青山へ移る）

○江戸鹿子江戸惣鹿子等に載る此時代の名家名物大略を左に挙る

△儒者 八代洲河岸林弘文院春常 鍛冶橋内人見友元同玄徳 林家二郎 坂井伯元
同伯隆 長谷川町木下順庵 浅草諏訪田伯栄 京橋浜尾甚庵 大伝馬町三丁目 斤山
完元 八代洲河岸浮庭春貞 辻春庵 △神道 京橋吉川惟足 渋谷府庵社家
△手跡 居之 九兵衛 南久保佐久木万次郎 仲村立長 △古筆 同利 本石町島
山井 鳶谷中ツヤオ仲 ツヤオ了我 △舞 露斎 石黒常軒 京橋清水宗川 日
本橋井上一有 市谷田町 茂山尚尚 △連歌師 里村昌程 同昌陸 同昌純 同玄祥
同昭春 石黒友彰 △俳諧師 本所芭蕉 本町一丁目河岸 露山 石町四丁目 才丸
山下丁工呻 南小田原町 諸々子 堀江町 幸入 同町 角 又市

町山夕 石町一丁目 嵐雪 南伝馬町 寿言 伊勢町 一晶 本町三丁目 立志 又市 玄流町 沾徳
堀江町 林中子
△絵師 本町 狩野洞雲益信 新橋弓屋町 狩野養朴常信 おか町 狩野永叔主信 同丁 狩
野右京附信 鍛冶橋 狩野探信守政 同 狩野探雪守定 竹川町 狩野友甫昌信
狩野良円友信 同 外記秀信 木挽町二丁目 狩野休円清信 同所 狩野内記是信 深川
狩野春雪信之 同所 狩野一学都信 八丁町 狩野求馬祖信 木挽町 狩野内匠英信
狩野主信
△浮世絵師 橘町 菱川吉兵衛 同 吉左衛門 古山太郎兵衛 石川伊左衛門 杉村治兵衛
石川流宣 鳥居清信 菱川作之丞
△浄瑠璃 堺町 土佐掾 葺屋町 和泉太夫 土佐太夫 町 江戸半太夫
説経 堺町 天満八太夫 呉服濱 若妻新四郎 堺町 江戸孫四郎 土佐太夫 呉服町 虎屋
永閑 人形町 江戸語斎 本大坂町 肥前太夫 新材木町 江戸次郎左衛門 新乗物町 対馬 又四郎
左衛門 土佐説経太夫 同 堀町 村山金太夫 南鍋町 大坂七郎太夫
△上るり本屋 大伝馬町三丁目 山本九左衛門 同所 △座三左衛門 長谷川町 松会三四郎
通塩町 鱗形屋孫兵衛 同所 山形屋市郎左衛門 △淀屋(?) 猿狩紀 日本橋南二丁目 杉村仁兵衛
南八丁堀一丁目 乃奥屋九左衛門 ねりや 真玄 △ 長谷川町 麻屋(?)武左衛門 横山町
二丁目 休笠 沖橋 きり小左衛門 四郎兵衛 △けごや藝 往(?) 一名天神前 お水左衛門
△大伝馬 茅田町 つるや △まんぢうや 茅場町 塩瀬山城守 △日本橋南一丁目 同 葺屋町
えびすや 羽形布袋屋 同所 えびすや △米まんぢう 金龍山ふもと 同所 つるや △ふくどら焼
浅草文殊院前 えびすや △桜餅 芝田町二丁目 おめや 長左衛門 △おこし米 苑町 藤屋
△麦殻 京橋 浅草すゑ町 柳屋 △鈴索 麩 西 天神前 △雛まんぢう 大伝馬町二丁目
穀のやき餅 町十一丁目 助惣 △ところてん 芝 橋車屋 △見せ屋 堀町 市川屋 おかず てきりや

国立公文書館 National Archives of Japan

△月提ゑ堀江町若なや本町形揚お雲丁△奈良茶堺町祇園屋同呉服屋弥陀ひあ屋△手打そばきり瀬戸物町丹波屋与兵衛△芳飯同ま見やや△食けんどん今泉山呉川沢潟や同両ノ今屋同呉△あさくさせんべい小八丁堀藤屋請売あまたその外あげてかぞへがたき事ハ略す

○爰に貳ある菱川が浮世絵ハ古より行はれたり宮川長春も此時代の浮世絵師にて元禄宝永の頃行はれたり

○此時代俳諧流行し世に行はる○箏曲(さうきよく)山岸検校生田勾当安倍(あさ)川流行いたる花都といふ座所小唄三味線の上手也

○一蝶(いつてう)が池の朝妻船の歌一名あさつま船といふ小唄流行投節(なげぶし)小うた二方よりも写りおは○新箇(しんこ)髭(ひげ)の無体(むたい)といひしも此頃あり

○一節切(ひとよぎり)の笛中古より廃れて行はれ此時代やる岩城吹ひたり

○世事該に揚弓ハみやこ一中(いつちう)此道を得たり一表二百本余に及的中あまりといふ元禄の頃ミに五郎右衛門といふ者人のあり

上手あり百八拾返りの矢員(やかず)江戸中諸役場の看板(かんばん)に記し無双の上手といへり此年八百八拾返り八常の事にして百九拾返り或ハ七八十返りにあらくの程に世人かくハ上手と称せり（下略）

一中ハ京師の人にして今井一中といへり貞享中江戸へ下り彼宅具ゟ揚弓射候蓬矢拵の伝解ハ退老を著せり上手の證の始なり一中の子小兵衛あり此頃より此矢流行に行はれ宝永の頃ハ廃れ行くても諸役場十二ヶ所をと再行其康子大全有り或ハ今ハこの戀かしく廃れたりとあり

○葛西に千二百所ち院観世音此彼所元禄中浄清といへる沙門発起にて成就せり○澤之丞帽子(ぼうし)（紫帽子の左右に紐のおもりを付る）行はる

○小吉文庫(こ)の子孫お流行○山本翁の説に手箱に青(あをだと)を塗る事元禄の末の頃に止宝永の頃より硯蓋(すゞりぶた)に塗る事に流し出すへしとぞいへり○吉原の遊女八朔(はつさく)に白無垢(しろむく)を着る事元禄中江戸町壱丁目巴屋源右衛門が抱(かゝ)へ高橋といへる太夫その頃瘧(ぎやく)をわづらひ

居けるが別深の客来りし時同居たる白むくの傾城にして揚屋入しける客の艶ありしより是を真似て八朔に出て一般に白むくを着る事になりし也 花街大全に見えたり 右は昔の名女小紫薄雲丹後等が[illegible] 是等のともいふ武家の例なりとぞ 八朔に白き衣裳を着し[illegible]尚て考

○本八町堀三丁目紀伊国屋文左衛門 材木屋にして世にいふ紀文大尽と號す千山と云 霊巌島須奈良茂左衛門 材木商なり世にいふ奈良茂大尽なり 此両人は元禄中俄に大分限となりし人の子なく花街雑劇に遊び種々の奢をきはめし巨万の家を費しける事諸人の知る所也 ここに贅せず

○江戸真砂六十帖 元禄中の事を記す に所々人物をえらびたる檜町に住せし今も檜木町へ引移りし由なり ○玄家菜話にいふ 武江嘉慶の経田小右衛門小山判官を殺しける跡と云事に妻が墓稲荷の社に小山判官が霊祠あり又妻忠の坂下に酒井小平次屋敷内にある屋敷の境の内に小山判官が塚にかしづけり此義殊りて元禄の頃まではありしが崩れて今はなくなりけると云く

○元禄中の豪家神田佐久間町に住せし尾張屋とかいへるもの唐弘の釈迦の立像を得て牛島弘福寺へ寄付し本堂を建立ありて下谷芸玉院へ安置す尾張屋代々の墓は芸玉院に在 彼文郷の縁もありしとぞ ○元禄中江戸の噺家志賀瑳切といへる

○元禄六年温清新の江戸絵図に本郷二丁目三丁目の方に比ケ所の浅地有る町方に比ケ所浅地あり 是新橋は後橋と記り 南向橋へ矢の内記の前なり 一つ目橋の際に浅してあり 此は天和元年の例に記せり 又橋は吉祥寺橋とあり今の昌平橋なり生橋とあり 此橋向の[illegible]と浅地あり

村松町元禄頃迄門内（法門の際にて連花町の旧地の例）に在りて青店と記せり（村松町八享保の頃にも尚この所に見あり）

昔のしあん橋今の如くあしわ橋とありしあん橋の名六八今のおもく小網町壱丁目の先の橋をしか記せり今の山下御門をひびやとあり（同十二年の図ニハ鍋島橋とあり　又此御門を黄八郎御門といへり）上野清水観音堂八今の摺鉢山と唱ふる所の山にあり大塚護国寺の門前皆田園なり

○三圍稲荷社内に一疋の狐あり例の茶店に来たりて手づからの菓子をうくと語ることきはじめに狐の子をおとしたりし

不稲荷や狐よび出す嬉しさよ　其角

宝永元年　甲申　三月晦日改元

二月廿七日地震此月まで度々震ふ

○永代橋と新大橋の間に道を付くる（去年の大火の時ここに遮られて人多く死したる由へなり）

○三月年号改元ありし祥吟

宝永の始りそ世界の春　舒里公

○五月二日本因流手跡元祖本因観怯卒（小日向本法寺に葬る）

○六月十五日より七月朔日二日江戸並近辺大雨大川筋并大水八月此月より山水出て下総猿ヶ股にて手押し崩し田畑並家々破壊して死亡人数を知らず本所深川浅草山谷下谷辺屋宇をひたす

○六月廿二日小堀政寛卒（遠州侯二男孫十郎といふ茶道家　書をよくせし年六十六）

○七月廿五日より九月朔日まで護国寺に於て土佐国五台山文殊菩薩開帳あり○八月廿八日高井立志卒（此十八才二世の立志なり）

○九月神田明神社御造営あり

○十一月霊雲寺再建廿五日遷座

○今年両国橋西詰に小松屋幾世餅の見世を出し名物となりしが世中絶たり

同二年　乙酉　四月閏

三月より回向院にて摂州昆陽の薬師如来開帳

○同月より護国寺にて摂州大沢山久安寺千手観世音一字年同開帳○正月より永代寺にて江州竹生島弁才天并観世音并総寧院成田山不動開帳○五月深川に渡あり

○六月十五日北村季吟翁卒 八十二才 池のはた正受院に葬る墓は不忍池の辺にあり辞世あり「花も見つ郭公をもまち出つ此世後の世思ふ事なき ○七月より回向院にて洛東霊山萬阿弥陀開帳

○同月本所法恩寺にて京本国寺釈迦如来開帳

○同月永代寺にて江州日吉明神開帳

○今年伊勢参宮諸国より参詣多し 俗におかげ参りといふ和漢合運ニ云閏四月上旬の頃洛中洛外童男童女七八才より十四五才に至り家内一同にいひあはせて参詣の素よりおもひ立の文を書して父母の許さゞるをもいとはず抜参りをなし又は親の許しを得て行るも有り貧しきものは施行を頼みて参詣す或は主人の目をしのびて行くもの多く妻子従僕なども家を出て伊勢に参る参詣の男女一日に二三万或ハ十万人といへり

洛中有徳の族施行を行ひ或ハ銭を施し或ハ布木綿の小袖単物笠等を施し又ハ牛車二乗の掛て抜参の男女にあたへしかハ江戸ハ猶都の風を慕ひ慈悲の心をおこさまし又伊勢路の所々にも諸人の施ありて宿を設る又秋七八月に至てハ諸国より参詣移て行へしハ京師にハ別て御祓をいたゞきしハ或ハ数十里の所を二三日に往還せし事あり或ハ死せしものを蘇りし後も人つゝがなく帰りし話あり又ハ夜中に犬の伊勢参宮しゝとて伊勢にて御祓大麻をかけるとて送り不思大麻と変せしなとのひのしる此時のさまを委しく記して宝永千歳記と題せる草紙あり又本府大人の家僕乃ふりも人に去閏月以来日蓮宗本能寺門徒なとハ中にもさみしくて云ふにいひもおし行しハ是ハ親を誘ひて参詣するにあらずして己が家にまかせて家眺より人を云なし行るさまにて浅ましき挑り施行を放しまどひ行るものにハまし行るへきにや云くこの比の親おほくの年どこのものとなるわ

る

○七月廿六日官医武田杏仙卒 長寿院と号す 東海寺中少林院に葬

○十一月廿四日数寄屋町より出火呉服橋鍛冶橋の内南北六町東西三町計り焼亡大名方八ヶ所焼失翌廿五日巳上刻火鎮る

○十二月青山善光寺谷中より移る 今も谷中に善光寺坂といふ有り是旧地なり

宝永三年 丙戌

○正月二日儒師榊原玄輔卒 名希翊号篁洲称小太郎 鮫河橋円通寺に葬る

○正月十日夜子刻神田須田町より出火して筋違見附土手町佐柄木町田町々本町石町通り小伝馬町旅籠町大門通り長谷川町新和泉町冨沢町辺村松町大坂町新材木町本町迄焼る翌十五日辰刻鎮る

○正月十八日回向院に於て明暦三丁酉年大火に死失せし者五十年忌追善法事あり

○二月廿日夜亥刻南鍛冶町より出火南水谷町東西二町類焼亡す

○同月十九日梨子の本戸田茂睡卒 戸田氏名恭光号茂睡梨本と号す浅草金竜寺に葬る 辞世 ... 今のもとをあらためて ... 向ひて

○同月十七日儒師栗山潜鋒卒 名愿 称源助 駒込... に葬

○六月元字金吹替あり是を宝字銀といふ

○七月より根津権現社御造営再興十一月成就迄は千駄木の地今の団子坂の辺にあり ○七月廿二日大雷数ヶ所に落る

○八月将監松林院(?)国司の家金を八幡宮へ掲る

○九月十五日亥下刻大地震 ○十一月九日医師薮生方菴卒 名毅之 通称

○十一月十六日巳刻巳谷中町より出火同丁半類焼 の父之三田 長松寺に葬 ○屋形船百艘に極める 元名同江戸砂子 拾遺にあり

○同月廿日夜子刻和泉町裏より出火大坂町須吉町表方通町堺町葺屋町并居ま(?)新材木町長谷川町迄武家方にて幅三町長十五町計り焼亡

同巳年 丁亥

正月十七日品川端地藤堂稲荷大僧正再建ありて称院と云白金(?)字部左衛

施餓鬼の事あり ○正月十五日申中刻浜町新材木町より出火本所一の
橋弁才天前より中の郷業平天神の社辺元小梅小梅村寺島に至り消る
○二月晦日俳人榎本其角卒 四十七才 号宝晋斎 二本榎上行寺に葬る
○三月八日大火あり 但し保録に記したり 委しからず 未詳 ○浮塚朝熊丘山虚空
行基草回向院にて寂せり ○五月廿二日東叡山勧学院了翁僧都寂 出羽の国八幡田村の人 黄檗流学才名有人也
○七月二日下谷霊梅寺住職増誉法印寂
○八月朔日小石川無量院辺より出火飯田町九段二平町程ヶ谷焼る
○九月四日熊谷安左衛門卒 浅草本法寺に墓あり碑の左に実相ゆかし月八十夜の闇をてらしみんを もろくとも浮世のなかの果も知らし
墨ニハヘムメれ 月八日成 一中日頼 ○九月廿七日儒師松浦交翠卒 六十二才 公黙 称交翠 号 日暮里南泉寺に葬る
○十月十三日俳人服部嵐雪卒 五十四才 号雪中庵 常楽寺に葬る 辞世の句 一葉散る咄ひとちる風の上
○十一月十六日連歌師里村昌陸卒 六十九才

○諸国銀札停止あり
○十一月廿日より富士山の根くさ須走り口焼る天曇く雷声地震
夥しく空に白灰降りて雪の如く地を埋む而も頻りに止まずのびあり
あり白昼暗夜のごとく不残灯挑灯をともしけり廿二日殊に甚しく
廿三日に至り天晴れ漸く日を拝して諸人安堵せしに又廿五日廿六日
再び天曇り砂降り雷声のひゞき震動地震あり是より黒灰降
廿八日平常のごとし此時出来たる山を宝永山といふ世人此を噂嚬
を哀しむ 此事折焼出来たり昔富士山焼る例は延暦十九年三月廿四日より四月十八日迄今年のごとく焼貞観元年五月十暦白焼るといふ
○十一月廿八日清人王寧宇卒 三田小山 大聖寺に葬

宝永五年 戊子 正月至

正月元日大雨 ○又正月二日武蔵相模三河等に砂降

○二月地上に白毛を生ず ○三月秋元侯臣岩田彦助といふ人武蔵入間郡堀兼村堀兼井の旧蹟久しく廃せんことを歎き石標を立縁由を揮毫して建る ○四月朔日茶人山田宗徧卒 八十五才 名周学 本所猿江地中に葬る其子二代目山田久悦宗屋は弱年ゆゑ宗後と云 ○同月郷人芳賀一晶卒 一説に宝永二年とも云 ○五月十文銭はじめて通用始る 表に宝永通宝裏の縁に永久世用とあり径一寸二分重二匁文字は小田原侯の臣にて林東溟の門人細井知慎之を書く ○深川の地蔵門 世に地蔵坊といふ 正元 金銅丈六の地蔵尊六躰を造立せしも今年より始て江戸六所に安ずる 南品川品川寺 今年九月成 山谷東禅寺 宝永七寅八月成 四谷太宗寺 正徳二辰九月成 巣鴨真性寺 正徳四午九月成 深川霊巌寺 享保二酉七月成 同所永代寺 享保五子七月成 ○冬より麻疹流行 ○十月廿四日算術の師関新助孝和卒 号自由亭 関流祖也 牛込浄輪寺に葬 ○雑司谷本地仏観世音開帳

○十一月十五日深川八幡宮造営遷宮 ○十二月二日狩野随川岑信卒す 四十七才 ○十二月廿二日後藤十代廉乗卒 八十二才 ○十二月谷中感応寺 今の天王寺 の隣なる雲寿庵にて唐の白楽天の尚歯会にならひ会あり 此時渡辺幸庵百廿七才にて上座にあり 猪子氏による 始めて此派の僧二人宗衣俗人素襖襦にて茶を立て 長坂酸老春秋家下咒門外百間達 此席二日丁寧の事 幸庵ハ本名掛兼丞駿河之夫 正十年壬午に生る 仕官の比ハさ手 庵の者の古実あるよし 幸庵ハ本名掛兼丞駿河之天正十年壬午年に生る 仕官の比ハさ色の勲功あり 仕を辞して後修行して唐土に行 天竺に至り 茶陀を始め唐の法及さを学んで 九十九才の時帰朝し宝永八年卒す 同に云幸庵老人の説に人八十才まで出る之八十の人と業て茶ありといへり

宝永六年 己丑

正月十文銭通用止 ○去年十月廿日の後より雨降らず正月十一日夜に至り雨降る 祈禱ありけり ○三月筑紫渡海運上御免 ○四月二日より七月二日まで深川八幡宮開帳

○六月宝字銀通用初まる
○七月より九月まで回向院にて洛東浄花院泣不動尊開帳
○九月多賀朝湖配所をゆるさる後英一蝶と号す　深川長慶町に住す
○十二月廿八日俳人小澤得入卒　本船町坊正なり　浅草誓願寺中に葬る
○渡辺幸庵対話記成　杉本義隣編写本

宝永七年　庚寅　八月閏

二月上野清水稲荷の社浅草新堀へ移る
○二月二ッ宝銀後吹改○高輪大木戸石垣を築せしめ道中札場定る○湯島因波寺開創開山木食義高上人寂　享保三戌六月七日遷化九十五才なり○甚回向院にて稲毛世尊寺如来開帳
○三月十五日角田川木母寺梅若丸七百卅三年忌大念仏回向

按るに縁起に梅若は貞元元年より八七百卅五年にあたれり○三月より五月まで永代寺にて奥州岩城変眼の弥陀并朝日将軍護念の観世音又兜摩の石不動尊開帳○二月より五月まで深川心行寺にて菰包の阿弥陀ならび源仲公軍陣の守仏千手観世音二月月不動尊并弁才天開帳○同月乾金并二ッ宝銀通用始り新金判通用止
○七月十一日羅漢寺開立の松雲禅師寂　六十二才
○七月より翌八月まで市谷八幡宮境内にて駿河法輪寺虚空蔵開帳○九月廿一日芝日比谷門跡焼にて諸人群集
○十月十日亥刻池上車町より焼亡　一本十二日ともいふ　日比谷二丁目より三丁目まで芝口一丁目二丁目三丁目焼る
○十一月琉球人来聘　正使美里王子　副使豊見城王子○武隠叢話今年まで

大火ありし中あるせり ○十一月青山梅窓院の鳥鐘を鋳ぬんくせし時傾持法蓮社某誉鏡的上人の夢に於て女来り我家畜身にして佛果を得るかたし依て一面の鏡を携へ来り願くは是を加へて鐘を鋳なば解脱を得るの因縁ともなるべしと云ふと見つまて夢覚て後側に一面の鏡あり上人奇異の思ひをなしこの鐘に加へて鋳しむといへり

○十二月十九日未下刻神田小柳町つゞき真田家の中屋敷より出火北西風烈しく本町石町八丁堀霊岸島海手にいたる長二十五町幅二尺町より七八町にいたる翌日辰刻鎮る

○当年七面坂七面大明神勧請 菊といへる女以前より蔵命の後夢の告ありて如此なるとぞ

此年間記事

宝永年中霊夢によりて東海の内に在りし石像の閻魔王江戸金地院境内に移さる

○宝永年中疫病流行りし時駒込の百姓丈八といふもの麦藁の蛇を作り駒込富士の市に売りしに求めたるもの疫癘の患をのがれしより後富士参りの方物となれり此時代近辺の童子麦藁を乳して詣けるとぞ ○薩摩芋は元禄の頃琉球より薩摩に渡り宝永元甲申年今あり薩摩より将渡り来長崎にて植ゑ始る種なり享保廿年乙卯小石川薬園に植ゑ出され元文年中より弘まるといふ記り 青木文蔵蕃藷考をあらはせり

○鼻紙袋この時世より始る

○宝永年中武州中渕広実法印寺中に向の鉢富士を拵へて門と花とを飾り人に見せたるや富士の雪の流りを

○寛文元年板遠近道印の江戸図に両国橋今の所にかゝりて有橋の東の南側矢の倉跡町屋と成護守其の吉羽町家池新地を並ふ　亀戸村鎮座天満宮より東の方に隅りてあり

武江年表巻之二畢

国立公文書館
National Archives of Japan